

## 「遠野物語」とアイヌ語地名

本州の東北地方にはアイヌ語地名が多く残されていると言う。

私は長年勤めた大学教員を去年定年退職して時間が自由になったおかげで、今年は岩手県の一関に3回、花巻と遠野に1回ずつ、全部で5回も東北地方を旅してアイヌ語地名を探訪する機会を得た。

8月末には「遠野物語ゼミナール」のために遠野を訪れた。2泊3日のゼミナールの後、地名探訪のために足を伸ばして釜石から三陸海岸を北上して宮古で一泊、宮古からバスで閉伊川<sup>ヘイガワ</sup>を遡って盛岡に出て新幹線で帰京した。

「遠野物語」というのは、農政学出身の民俗学者、柳田国男が遠野郷出身の佐々木喜善から郷土に伝わる伝説や風俗、信仰などの民話を聞いて、柳田が簡潔な文語体で書いた119編の民話からなる小冊子である。姥捨てや子殺しなど恐ろしい内容の話がさりげなく描かれているが、その舞台となった村や山川の地名がアイヌ語起源と思われるものが少なくない。

といっても、文字のなかったアイヌ語の地名はアイヌ語の解らない和人によってその本来の意味とは無関係に漢字で示されているので、一見しただけではその読み方も解らないような難解な地名ばかりである。

例えば、漢字で栃内、来内、似内、似田貝、猿ヶ石、続石など書いてあってもよそ者にはその読み方も意味もさっぱりわからない。これは、トチナイ、ライナイ、ニタナイ、ニタカイ、サルガイシ、ツツキイシと読む。でも、もしアイヌ語が少しわかったらこの謎めいた名前が意味を持ち納得できるものになるのである。

では、これらの中から二つ三つ選んで、アイヌ語で解いてみよう。

栃内 トチナイ<sup>トチナイ</sup>、toci-nay（栃の実沢）

～ナイというのは「沢、川」を意味し、東北だけでなく北海道や樺太にもあるアイヌ語地名の代表的なことばである。トチはアイヌ語で「栃の実」のことで、<sup>トチナイ</sup>tocinayは（栃の実沢）ということになる。因みに猫が喜ぶマタタビもアイヌ語で

マ タ タ ン プ  
matatampu と言う。つまり、日本語のトチもマタタビもアイヌ語起源らしい。アイヌの人々は栃の木で杵や臼を作ったり実は乾かして貯え、目病や傷の薬にしたそう。

似田貝 ニタカイ、<sup>ニタッオカイ</sup> nitat-okai (谷地の沢山ある所)

ジクジクした低湿地つまり谷地のことをアイヌ語で <sup>ニタッ</sup> nitat という。これにナイがついた地名は花巻の <sup>ニタナイ</sup> 似内 などあちこちにある。似田貝は遠野物語68話に出てくる部落名であるが nitat-okai (谷地の沢山ある所) と読める。はたして柳田は「このあたりは葦しげりて土固まらず。ユキユキと動揺せり」と書いている。

続石 ツツキイシ、tu-tuk-usi (二つの突起物が出ているもの)

遠野駅から西に約10km行ったところに三つの巨石がくっついてできた奇岩が観光スポットの一つになっている。これを <sup>ツツキイシ</sup> 続石 と呼んで地元の人に親しまれている。駅の近くに続石というスナックもある。私はまだ現地に行っていないが写真でよく見ると、大きな石が二つ地面から突出してその上に平べったい巨石がのっかっている。私にはこれがアイヌ語で tu-tuk-usi (二つの突起物が出ているもの) と読めるがどうだろうか。tuk というのは、下から突き出た山や岩などの突起物のことで、附馬牛 ツキモウシ tuk-oma-usi (凸山のあるところ) も関係がありそう。これは勿論まだ私の試案にすぎない。

このようにアイヌ語地名を詳しく見てくると「遠野物語」が誕生するずっと以前からこの地域にアイヌ語を話す人々が生活していたことがわかる。この人々が日本史に登場するエミシとかエゾと呼ばれる民族だったかどうかはまだ確証はないが、無関係ではありえないと思う。無関係どころかこのアイヌ語地名こそ東北地方に住む人々の歴史を明らかにする大きなカギを握っていると私は確信する。一人でも多くの人々がアイヌ語に関心を持ってほしいと私は心から願う。

(アイヌ語研究家・元横浜国立大学教授 村崎恭子・むらさききょうこ)